

観光は、自治体の地域産業政策において重要な柱ですが、投資的な性格も強いいため、そのあり方は十分に吟味される必要があります。「地域を消費する」のではなく、「地域の持続可能性」を高めていく観光のあり方をどのように描いていくのかを考えます。

## 持続可能な観光を考える

東京大学教授  
にしむらゆきお  
西村幸夫



観光の問題は立場によって論点が大きく変わるとい難しさを持っている。

たとえば、ゲスト側の視点では、観光地とは目的地であり、選ばれ続けるデスティネーションとしていかなる努力をしていかなければならないか、という問題として捉えられる。そうしたソフトは「商品」と見なされ、観光の問題は同時にプロモーションの問題でもあるということになる。

他方、これをホスト側に立って見ると、観光とは地域経済を立て直すための地域経営の一環であり、地域の文化政策であるということになる。まさに「まちづくり」の一部なのである。

一方では観光地を冷徹に比較対象のまな板に乗せ、評価するのであるが、他方では観光客は地域にお金を落としてくれる顧客であり、いかにより多くのお金を落としてくれるか

というこれまた冷静な仕掛けに腐心することになる。

さらに見方を変えると、上述の議論はすべて観光に関連している当事者の枠内の考えであって、観光と直接関係していない地域住民にとっては、観光客は地域環境を荒らしてしまいかねないやっかいな存在であり、もしくはゴミだけを地域に落としていく迷惑な存在だということも言える。文化にしる自然環境にしる、住んでいる人々がまずは享受し、受け継ぐべきものであって、他者を前提とした見せ物ではないはずだ、という主張もある。これは、観光は地元主体の生活の結果であって地域振興の手段ではない、という主張につながる。

こうした種々の立場の違いを乗り越えて、観光の将来像を建設的に考え、その持続可能性を考える、ということは何を前提とし、何をやらなければならないということなのだろうか。

\*\*\*

おそらくより大局的な視点から地域を見つめる、というところから観光の問題を考え直す必要がある。

つまり、ホストの立場であろうと、ゲストの立場であろうと、対象となる資源がなくなってしまうたら、すべての議論が崩壊してしまう、ということから出発すべきであるということである。観光の関係者であろうがなかろうが、地域が崩壊してしまつては、その地で生きていくことはできないということは明白である。

すなわち、地域の持続可能性を論じることは、観光をより高い視点から、統合的に論じることにつながる。

これを別の観点から表現すると、観光の問題を地域社会、地域環境、そして地域経済の統合的な課題として論じる、ということになる。そして興味深いことに社会・環境・経済という三つの柱が調和して発展することこそ、サステイナブルディベロップメントの定義そのものなのである。

つまり、持続可能な観光を考えるということは、観光の本質——立場の違いを乗り越えて——議論できるプラットフォームに立つということなのである。

